

## Y10a 東北に飛来した球状浮遊物体騒動で再認識した天文教育・広報普及活動の重要性

服部 誠（東北大学理天文）、伊藤芳春（元宮城県高校教員）、遊佐 徹（大崎生涯学習センター長）、大槻 功（アマチュア天文家）、山崎 剛（東北大学理地物）

2020年6月17日に宮城県上空を浮遊する気球が宮城県・福島県の広域で目撃された。様々な地点からの観測情報から同日午前8時半頃、気球は同時刻蔵王町上空高度約22kmを浮遊していたと推定される（参 伊藤(天文教育研究会(2020))。前日には秋田で目撃されている。同タイプの浮遊物が2021年9月3日にも八戸で目撃された。

これらの目撃後、客観的データの分析に基づかず強引な論法で正体について結論づける報道があった。2020年の目撃後著名気象予報士が奥羽山脈を超えて飛来した可能性は無く高度2-3km辺りを浮遊していた気球であるという記事を公開した。当日の風向きのデータを引用して一見科学的考察に基づいているかのように装っている点が罪深い。2021年の目撃後大手TVが大学教授のお墨付き情報として8月に行われた米国のガールスカウトイベントで参加者が打ち上げたバルーンの一つが地球を周回して飛来したものであり、これで正体が判明したと報道した。写真など具体的データは一切示さず、大学教授のお墨付き＝正体判明と報道する姿勢は大いに問題がある。

これら一連の事象から権威者の発言や大手報道機関の報道を鵜呑みしない科学的批判的精神を保持した市民育成の重要性が再認識される。天文教育・広報普及活動はそのような市民生涯教育の機会を提供する社会的に大きな位置付けを占めている。また市民が高精度のデジタル機器を携帯する時代になり、今回のような突発的事象が観測・記録され謎の解明に大きな役割を果たすことを実証する好例となった。